

ニコライ・ネフスキー採集の女性叙事詩テキスト¹ 「レペンノツの人にさらわれた女性」

阪口 諒

ネフスキー、アイヌ・フォークロア、女性叙事詩、メノココカラ、恋愛結婚譚

1. はじめに

本稿はロシア人東洋学者ニコライ・ネフスキー(1892-1937)が採録した Menokoyukar「女性叙事詩」の訳註である。対象とするテキストはネフスキーのアイヌ関連遺稿をまとめた *Ainskii Fol'klor* [アイヌ・フォークロア] (Nevskii 1972) に収録されているものである。同書は1991年に魚井一由氏によって日本語訳がなされ、北海道出版企画センターから『アイヌ・フォークロア』というタイトルで刊行されている(本稿で扱う物語は「娘の幸せ」というタイトルになっており、國學院短期大学口承文芸研究会1995、國學院短期大学口承文芸研究会編著2002にも掲載されている)。原著はロシア語で書かれていたため、魚井氏による翻訳が出るまでは、日本でほとんど利用されておらず、ネフスキーによるアイヌ語研究の実態が広く知られていなかったであろうことは想像に難くない。ただ、その翻訳には既に中川(1992)が指摘するように、問題のあるところも散見される。そこで、本稿ではアイヌ語原文がある伝承のうち、公刊されたテキスト数が少なく、かつ類話比較という点でも興味深い ‘Menoko-jykapā’ (Nevskii 1972: 53-66) という物語を取り上げる。同資料が利用しやすくなるよう、原著のアイヌ語表記とその現行ローマ字表記、日本語訳を付し、適宜註釈を加えた。

2. 採録者 ニコライ・ネフスキー

ロシア人東洋学者ネフスキー(1892-1937)はサンクトペテルブルク大学東洋言語学部で日本語と中国語を修め、1915年に23歳で日本へ留学する。2年で帰国の予定であったが、1917年にロシア革命が起こったために帰国ができず、日本で研究を続けることになった。日本では柳田国男や金田一京助、折口信夫らと交流を深め、1929年まで14年間にわたって日本で教育、研究に努めた。1919年からは小樽高等商業学校(現・小樽商科大学)のロシア語教師となっているが、このころから鍋沢コポアヌ

¹ 本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号20J11234)による成果を一部含んでいる。本稿で扱う女性叙事詩は2017年度にエフゲーニー・ウジーニン氏と検討するために準備したものが元となっている。翻刻と訳註を準備したままで検討せずに中断していたものを、2019年度に東京大学で山田慎太郎氏と検討を行い、2020年度に訳注の加筆と解説部分の執筆を行った。その後、中川裕先生と藤田護先生から表現の解釈に関してコメントを頂き、いくつか誤りを修正することができた。感謝申し上げます。なお、本稿におけるロシア語はアメリカ議会図書館(LC)方式で転写した。ただし、テキスト部分におけるキリル文字表記アイヌ語は原著のままである。

とタネサンノという二人の女性からアイヌ語を習い、いくつかのフォークロアを記録している。1922年には大阪外国語学校（現・大阪大学外国語学部）に移るが、その後もアイヌ語の語り手である鍋沢ユキを大阪に呼び寄せ、アイヌ語の研究を継続している。1922年の夏に宮古島へ旅行して以来、宮古島研究に没頭するようになる。その後、台湾のツォウ（曹）語や西夏語の研究も進めるなどアイヌ語以外の研究でも広く知られている。1929年、ネフスキーはロシアへ帰国し、1935年には論文集“*Vostok (literature Kitaia i Iaponii)* [東方（日本と中国の文学）]”に‘*Ainskii Fol’klor* [アイヌ・フォークロア]’を発表しているが（Nevskii 1972: 9-46 [ネフスキー1991: 15-59] に再録）、そのすぐ後の1937年にネフスキーは日本のスパイとして処刑されてしまう。後に名誉回復がなされ、西夏語、宮古語などの研究と共にアイヌのフォークロアに関する遺稿が整理され、アイヌのフォークロアに関する部分は1972年に *Ainskii Fol’klor* (Nevskii 1972) として出版されている。近年では田中（2011～2014）によってネフスキーの活動、特にアイヌ研究に関して詳しく紹介されている。採録者のニコライ・ネフスキーの生涯に関する詳細は生田編（2003）や加藤（2011）参照。

ネフスキーが採録したアイヌのフォークロアは *Ainskii Fol’klor* (Nevskii 1972) 以外にいくつか残されている。神謡2篇の日本語訳（ネフスキー著・岡編 1971: 67-73）のほか、ロシアの科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部に残されたネフスキー文書には4篇の伝承が残され、3篇が田中（2012-2014）で翻刻されている²。また、*Ainskii Fol’klor* (Nevskii 1972) のうち、「キツネ神とカワウソ神」（Nevskii 1972: 102-109）「この世にセミの生まれたわけ」（Nevskii 1972: 99-102）として日本民話の会編（1991）にアイヌ語からの日本語訳が掲載されている。

3. 女性叙事詩というジャンル

本資料は沙流川下流域でいうメノコユカラ *Menokoyukar* というジャンルに該当する。沙流川流域でも上・中流域では神謡のことをメノコユカラということがあるため（沙流川下流域で神謡のことはカムユカラ *Kamuyyukar* もしくはカムユカラ *Kamuyukar* という）、メノコユカラというアイヌ語名称をジャンル名として使用することは混乱を招く³。そのため、本稿では「人間の女性が主人公で、女性が謡うという種類の叙事詩」を「女性叙事詩」とし、これをジャンル名として使用する。このジャンルの公刊された資料の紹介と今後の展望が荻原（2014）で述べられている。

女性叙事詩のうち、録音が公開されているものとしては『アイヌ語音声資料 11』（早稲田大学語学教育研究所アイヌ語研究会編著 1998）がある。『アイヌ語音声資料 11』には沙流川下流域の話者が

² Nevskii (1972) [ネフスキー1991] に収録の伝承と重なるが、原文とネフスキー自身による日本語訳が付加された「蟬の由来」（田中 2012 に掲載）「*Amam-e-čikap-po*（雀子）」（田中 2013 に掲載）「*Širus-čiri*（椋鳥）」（田中 2014 に掲載）のほか、「*Kapa-čiri* 鷺」（未公刊）が存在するという（田中 2014: 39）。

³ 日本に残されたネフスキー草稿の断片である「メノコユカラ二編」（神謡のテキスト）がネフスキー著・岡編（1971）に収められているが、この「メノコユカラ」は神謡のことを指している。

1961年に語った女性叙事詩の録音が収録されているので、語られ方の様子を伺うことができる⁴。このジャンルは「昔話などとは違って韻文らしく、語り手自身の表現で言うと『すこうし節をつけて』語るものであるという（早稲田大学語学教育研究所アイヌ語研究会編著 1998: 11）。

Nevskii (1972) [ネフスキー1991]において、女性叙事詩が2篇収録されているが、1つ目は紫雲古津出身の鍋沢コポアヌから1922年2月に採録したものである。2つ目の叙事詩の語り手は書かれていないが、鍋沢コポアヌ、タネサンノ、鍋沢ユキのうちの一人である（3人とも沙流川下流域出身）。女性叙事詩についてネフスキーは次のように記している。

「主人公が男である英雄物語とならんで、主人公が女である歌物語も沢山ある。もし、この女の主人公がシヌタプカウナムット [Sinutapkaunmat]、つまりシヌタプカ [Sinutapka] の女性ならば、物語はメノコユーカル [menokoiukar] 《女の歌》と呼ばれ、オタシユド^マット [Otasitunmat]、つまりオタシユド [Otasit] の女性なら^ハイ [Khai] と呼ばれる。この一連の物語の語り手も保持者もみな女性である。ユーカル [iukar] が戸外でのアイヌの昔の戦いの生活を描写しているのに対して、メノコユーカルはアイヌの家の内での生活、それも特にアイヌ女性のそれを叙述している」 [ネフスキー1990: 30、[] 内は原著 Nevskii 1972: 27 におけるキリル文字表記の転写]

女性叙事詩に関して、金田一は早くからその存在を指摘している。これは「婦女子の間の伝承にかかり専ら女兒の恋物語を謡う」（金田一 1992[1918]: 61）もので、「女子が伝承して演ずるものではあるが、それよりも、曲中の主人公そのものが常に女子である所に、この名称の本義がある」（金田一 1993[1931]a: 161）とする。なお、金田一自身が採録した女性叙事詩としては「口琵琶の曲」（金田一 1993[1933]: 189-192）「黄金の首飾」（金田一 1993[1931]a: 15-16）が知られている。

なお、門別町郷土史研究会（1969: 369-404）には男性が筆録した女性叙事詩「IYOCHI-UN-MAT 余市姫」が収録されている。これは menoko yukar とあるもので、伝承元は記載されていない。筆録者の鍋沢元蔵氏自身の語りがNHKに保存されているとあるので、鍋沢氏自身のレパトリーと考えてよいと思われる。同じく門別町郷土史研究会（1969: 405-453）に収録の「IMONKA-OYAN-MAT トリカブト姫」も女性叙事詩の可能性がある。同じ筆録を基にしたものが浦田編（1998: 405-453）に掲載されているが、それは筆録者である鍋沢氏の言によれば「神のメノコ・ユウカラ」（浦田編 1998: 477）だという。女性が主人公となる叙事詩を男性が伝承することもあったのかもしれない。

久保寺編著（1977: 31-32）は女性叙事詩（久保寺自身は「婦女詞曲」と称する）について、胆振・日高地方で女性の中に伝承されていると指摘し、女性をヒロインとするものであるとし、概して、少年英雄が主人公となる英雄叙事詩よりもやさしい言葉で叙述するとしている（ただし、語り手によ

⁴ 早稲田大学リポジトリ (<http://hdl.handle.net/2065/5599>) で pdf と mp3 がダウンロード可能 (20200923 現在)。

ては少年英雄のものと言葉が変わらないとも指摘する)。久保寺が採録した女性叙事詩は 15 篇あり、シヌタブカ Sinutapka 媛が主人公のもの 9 篇、オタスツ Otasut 媛やオタサム Otasam 媛を主人公とするもの 3 篇、ムライ Muray 媛・ルペットム Rupettom 媛・レプイシリ Repuysir 媛を主人公とするものがそれぞれ 1 篇ずつあるという。久保寺編著 (1977: 32) で女性叙事詩として挙げられている 15 篇は内容によってほかのジャンルから分離されたものであり、形式的には神謡と重なるものがある。上述の 15 篇のうち 4 篇には、神謡に特徴的なサケヘ sakehe「折り返し」が付くという。サケヘを持ち、伝承者も「神謡 Kamui-yukar」と意識している、シヌタブカ媛自叙の 2 篇とオタスツ媛の 1 篇が久保寺編著 (1977) に原文対訳で収録されている (ルペットム媛の 1 篇はノックルンカ notkurunka というサケヘを持つとあるが久保寺編著 1977 に収録されていない⁵)。残りの 12 篇のテキストは公開されていない。ただ、Philippi (1979) には久保寺が採録した女性叙事詩テキスト (タイプ原稿) からの英訳が収録されている。本稿で扱うテキストの類話である Section 31 は、英語のタイトルが Woman's Epic であることから、女性叙事詩であることは確実である。その次の Section 32 は The Woman of Poi-Soya というタイトルから女性叙事詩のように見えるが、オタサムンクル Otasam un kur「オタサム人」が主人公であり (ただし叙述者は何度か入れ替わる)、ハウ haw [オタスツやオタサムの者が主人公となる英雄叙事詩] というジャンルに属するものだという。なお、久保寺は「ユーカラ」「ハウ」「婦女詩曲」の 3 者を別のものとして扱っているので (久保寺編著 1977: 27)、その点からもハウとされる Section 32 の伝承は、久保寺の挙げる女性叙事詩 15 篇に含まれていないと思われる。

4. 類話

4.1. あらすじ

本編の叙述者はトミサンペツ Tomisanpet からさらわれてきた娘である。

レブンノッで兄 (レブンノッ人) に大切に育てられていた。子グマを 3 年間育てた。兄はクマ送りの準備をするため交易に出かけた。しばらくして兄の舟が戻ってきたが、なぜか村の下の者のところへ荷物を下ろしている。私が泣きながら横たわっていると、夢の中に神のような少年 (= 子グマ) が現れ、「あなたはトミサンペツの女性で、レブンノッ人が妻にしようとあなたを攫って育てていたのだ。レブンノッ人が帰ってくるとき、村の下端の女性がレブンノッ人に、あなたが子グマと犬のように一緒に寝ていると言ったので、彼らは私たちを殺しに来る」と言った。

朝になって私たちを襲いに来た者たちが家の前に来たが、子グマはそいつらを一人残らず倒

⁵ 久保寺編著 (1977) にはノックルンカ Notkurunka というサケヘを持つ神謡 (や聖伝) が記録されているが、どれもセミの起源とセミが夏にしか泣かない理由などを語る話 (神謡 34, 35、聖伝 13) である。なお、聖伝 13 は伝承者による分類ではないようである。

した。子グマは私にびったりくっついてるように言い、私を故郷のトミサンペツに連れて帰ろうとした。子グマは海の方へ走っていき、海を渡って向こう岸に上陸した。そこから川沿いに上流へ向かった。途中で人口の多い村があったが、その人たちも私たちに襲いかかってきた。それも子グマが一人残らず倒した。さらに川に沿って上流に行くと、ほかのところから来る川の水源があり、その川に沿って下っていくと、河口に山があり、その上に立派な城が建っていた。その城のそばに着くと、美しい髪とひげを持つ男性が出てきた。家の中に入ると、見事な宝壇があった。年下の男性もいた。私が来た理由を話すと、二人とも「妹よ！」と言って、私たちはお互いに泣いた。

私たちは子グマを送る準備をした。子グマを見送る時に涙を流していると、幣棚の上の子グマが「私を見送る時には、指についた食べ物も舐めてはいけない」（クマの肉を食べると結婚できなくなる）と言ってきた。そのため私は儀式の御馳走に一口も触れなかった。子グマは無事に送られた。

ある日、黒い服を着た青年（＝クマ）がやってきて、「人間の女と結婚したいと父に言ったところ、父は『私は尊い神であるので、お前が人間の女を妻にして神々の国で結婚するなら、尊い神々に叱られるだろう』』と言った。人間の女と結婚したいなら、そこに降りて結婚しなさい！』』ということを行った。兄たちはその男性に感謝した。そして、私たちは結婚して幸せに暮らした。私の兄たちもまた、たぐいまれな女性と結婚して幸せに暮らした。

この叙事詩の主人公はトミサンペツからさらわれてきたので、次の類話1と同じくシヌタプカの人だと考えてよいと思われる（トミサンペツはシヌタプカのもとを流れる川）。以下では、本篇をネフスキー版とし、類話1を久保寺版として区別する。

類話1 : Woman's Epic: Repunnot-un-kur" (Philippi 1979: Selection 31)。[久保寺版]

語り手：平賀エテノア、筆録者：久保寺逸彦、採録日：1932年12月26～28日

フィリッパイは久保寺逸彦のタイプ原稿から英訳している。この女性叙事詩の梗概は荻原（2014: 129-131）にまとめられている。

ネフスキー版と同じく沙流川下流域の伝承であり、話の展開もほとんど同一であるが、細部が詳しく語られている（ネフスキー版はあらずじというような語りとなっている）。行数は2500行ほどと思われる（Philippi 1979の英訳は原文に行ごとに対応している。英訳自体は1918行であるが、途中で同じ内容を語る500行以上が省略されている）ネフスキー版が560行であることを考えると4倍以上の長さとなっている。

類話 2 : 「神の仔熊が女の子を救い出す物語」(北海道教育庁生涯学習部文化課編 1999: 7-69)

語り手 : 八重九郎、聞き取り : 萩中美枝、採録日 : 1973 年 2 月 7 日

補足 : 八重九郎語り「ポユンメノコ ヤイエユカラ poy-un-menoko yay-e-yukar (女の子が自らを物語る)」『サコロベの世界』(pp.28-29) 1978 年、札幌テレビ放送) と同じもの。

主人公はオタシトウクルの孫娘であり、ポノシタシトウの娘だろうとされる (p.8)。

自分の村は何という名前であるのかも分からずに娘が神の造った館(カムイカラチャシ)で暮らしていた。6年養っていたクマを神の国へ送り返すことになった。その時、館に住んでいた者たちは「幼い娘は霊力の強い者たち(ヌプルウタリ)の子供なので何をしでかすか分からないから、クマと一緒に殺してしまおう、そうすれば宝物を自分たちのものにできるのだから」と相談し、交易に出かけた。娘は何も知らずに、クマの世話をしていたが、クマの息がこう聞こえた。「館の者たちはあなたを殺そうとしているから、私につかまって逃げてください」と言う。娘は父親たち、母親たちの大事にしていた着物を出して身に着け、クマと共に逃げた。クマは川の中、海の中を泳いで進み、クマが祈ると海原の上に風が巻き起こり、追ってきた連中は全滅した。海を渡りきり港の降り口の側に到着すると、港への降り口に沿って上に行けと言って、クマは力尽きて死んでしまった。登っていくと神の造った館が建っており、そこへ行って事情を話すと、おじさん、おばさんであることが分かった。主人公を逃がしてくれたクマは2頭も3頭も送る以上の立派なクマ送りを行った。

類話 2 は釧路の伝承で、サコロベ Sakorpe というジャンルに属するものである。ネフスキー版、久保寺版と異なり、レブンノツ、シヌタプカといった村同士が戦うという展開はない。奥田(1994)が静内地方の典型的な英雄叙事詩について指摘したように、この物語においても、「虎杖丸」をはじめとした沙流・胆振地方の英雄叙事詩に見られるイシカラ「石狩」、イヨチ「余市」のような地名は見られない。

なお、女性叙事詩というジャンルが釧路地方において独立のものとして存在するのかは定かではない。ジャンル呼称のうえでほかの物語群から区別するのはごく限られた地域ではないと思われる。管見の限り、沙流川下流域と同じくメノコユカラという語とジャンルが確認できるのは、久保寺編著(1977: 31)が指摘するように、沙流⁶から胆振にかけての地域である⁷。

⁶ 沙流川中上流域(神謡をメノコユカラと称する地域)で女性叙事詩が独立したジャンルであるのかは不明である。「木村キミさんのシヌタプカ人の妹の自叙」(アイヌ無形文化伝承保存会編 1982)は女性叙事詩的な内容であるが、ユカナルパイェ yukanrupaye「ユカラの散文語り」として語られている。なお、ユカライルパイェ yukar irupaye やユカナルパイェ yukanrupaye が男性の語るユカラ yukar とは別に発展したものである可能性が指摘されている(中川採録・訳・註 2008; 2012)。

⁷ 石狩の伝承に対して「メノコユカラ(〜ル)」「メノコユカラ」と称されたものがある(魚井・廣田 2002, 2003 ;

4.2. 解釈

本編の主人公は、トミサンペツからさらわれて来たということからシヌタプカ・ウン・マツ Sinutapka un mat 「シヌタプカ媛」だと考えられる。これは典型的なメノユコカラ「女性叙事詩」の主人公である。ネフスキーが採録した本篇は久保寺版に比べると、かなり簡潔な描写になっているので、以下では久保寺版にしかない部分を列挙してみる。

(1) 主人公が孤児となった理由

両親は交易に行く途中、レブンカラフト Repun Karapto 「沖の樺太」に招かれて、父親（シヌタプカ ウンクル Sinutapka un kur 「シヌタプカ人」）は悪い酒を飲まされ、酔っ払って沖の樺太の宝物をかうと言ってしまふ。沖の樺太はシヌタプカ人の持っていた舟の守護神を見たいと申し出たが、双方が激怒して戦いが起こる。戦争は樺太全土、さらにはレブンクルの無数の土地に広がり、その戦いのさなかに父親は殺されてしまふ。母は逃れた先のサンタ「山丹」でとらえられるが、その時に母の背中にいた赤ん坊（主人公）をレブンノッ人がさらっていく。

(2) トミサンペツ（シヌタプカ）に向かう途中で通過する村の名前

久保寺版によれば、シヌタプカへ向かう途中で主人公を襲うのはイシカラ Isikar 「石狩」人であるとされるが、シヌタプカの一族とイシカラ人とは親戚であり my evil younger brother と言及されている（Philippi 1979: 292）。他の多くの話と同様にイシカラ人は主人公と敵対し、主人公を守る子グマによってレブンノッ同様に殲滅されてしまふ⁸。

(3) 主人公の兄たちの正体

無事にトミサンペツにたどり着いた主人公たちは兄たちと再会するが、兄たちの正体はカムイオトプシ Kamuy'otopus とポイヤウンベ Poyyaunpe である。どちらもシヌタプカ人を主人公とする英雄叙事詩（ユカラ yukar）に典型的な登場人物である。カムイオトプシは、ユカラにおいて主人公の兄としてよく登場してくる人物であり、名前の通り（カムイ kamuy 「神の」オトプ otop 「髪の毛」ウシ us 「ついている」）美しい巻き髪とあごひげを持つ美貌の男性として描かれている。久保寺版ではフィリップパイが註 32 で指摘するように、ポイヤウンベはカムイオトプシより上座に近い名誉な位置に座っている。

ネフスキー版、久保寺版の両方とも主人公は孤児で親以外のものに育てられている、いくつかの

砂沢語り、浅井亨訳註（1983a, b）。これが伝承者による名称であるのか、もともと石狩の名称であるのかは不明であるが、「石狩の特に旭川地方では、戦物語のユーカーに対する哀れなやさしい女子の情事を謡う物語がサコロベであると言って、サコロベはさながら、日高・胆振の『女子のユーカー』（mat yukar）[本稿でいう女性叙事詩] というものにあたる」という記述もあり（金田一 1992[1935]: 387）、判然としない。北海道東部におけるユカラ yukar とサコロベ Sakorpe の差異に関しては吉田（1953: 84-85）や萩中（1987: 390）、北海道教育庁生涯学習部文化課編（1993: 57）参照。なお、樺太では女性が主人公の叙事詩は少年英雄のものと同じくハウキ hawki とされている（Pilsudski 1912）

⁸ ユカラ [英雄叙事詩一般ではない] におけるイシカラ人の役割に関しては中川（2009）が詳しく扱っている。

戦闘場面があるといった、ユカラ一般によく見られる特徴を有している。この女性叙事詩では、主人公の女性はクマと結婚し、その兄たちも素晴らしい女性と結婚して幸せに暮らすというような結末だが、このような展開はいくらか散文説話に似ているように思われる⁹。子グマが人間の青年として主人公のもとに再来したときも、カムイの世界で人間の娘と結婚すると尊い神から非難されるので人間の世界へやってきた、と語っているが、こうした人間とカムイの結婚に関する制約も散文説話もしくは神謡といったジャンルを髣髴とさせる。

5. 表記

ネフスキーはキリル文字を基本に若干のローマ字と補助記号を加えているが、田中（2012；2013）の調査から、ネフスキーの手稿にはローマ字で書かれたものが存在することが明らかになっている。田中（2012；24）は「ネフスキーが日本から持ち帰ったローマ字表記のテキストを、ソ連に帰国後、ロシア文字に変換した可能性も考えられる」と指摘している。ただ本稿で対象とするテキストの筆録当初のノートは確認されていないため、元がローマ字表記であったのかは不明である。

ネフスキーの表記で特徴的なのは、r 終わりの音節が、r+母音の音節と異なる表記で書かれている部分があることである。金田一の教えも受けながらネフスキーがアイヌ語の研究を進めていたことはすでに知られているが、金田一は知里幸恵からの指摘で初めてその区別を知っている¹⁰。音節の区別が存在することは金田一からの指摘で知っていた可能性はあるが、表記に関しては実際に聞こえたとおりのものではないかと思われる。特に韻文では r 終わりの音節に母音が付加されることがあるが、同じ語彙であっても2通りの表記をしていること（例：001 реп-ун-ног-ун-курү/086 репунногункурү）から（下線部 күрү と күрү はそれぞれ kuru と kur に相当する）、また、いくつか音韻的区別のない音をかき分けていることなどからも、聞こえたとおりに表記したものではないかと思われる。

『アイヌ語音声資料 11』に収録された女性叙事詩に関して、田村すず子氏は「1行の時間的長さを整えるための工夫も、あちこちに見られる。たとえば冒頭の a=kor aca アコロアチャは4音節だが、子音 r に母音をつけ、しかも引き延ばしてアコロアチャと、6拍にして言っている」（早稲田大学語学教育研究所 アイヌ語研究会代表 田村編著 1998: 12）と記している。ネフスキーの書き分けもこうした語りの工夫を反映したものである可能性がある。

⁹ この話の結末はカムイと人間の結婚であり、ユカラによくみられるシヌタブカの娘とイヨチ人の結婚のように、ほかの地の一族と血縁関係を結ぶものではない。ただし、女性叙事詩の「黄金の首飾」（金田一 1993[1931]a: 15-16）ではオタサム姫とイヨチ人、オササム人とイヨチ人の妹が、久保寺が女性叙事詩に含める「神謡 104-106」（久保寺編著 1977）においてもシヌタブカ媛とイヨチ人、オタスツ姫とチュプカ人が結婚するという結末を迎える。

¹⁰ 知里幸恵自身がアイヌ語と日本語で筆録した神謡は『アイヌ神謡集』として 1923 年に出版されている。同じく 1923 年に金田一が出版した『アイヌ聖典』では、部分的に r 終りの閉音節が開音節で表記されているが、知里幸恵の指摘にもとづく語形の再検討の過程であることが伺える（奥田 1998: 94）。中川（2006）も『アイヌ聖典』に収録されている 8 篇のうち、「大伝」の 1 篇のみ、知里幸恵が監修したのだと推測している。

p のまえで n が m に変化したところも e-ум патек (eum(<eun) patek) (52 行目) のように表記している、yjмам реп-уџ-ка (ujmam repuŋka [uymam-repunka]) (24 行目) のように k の前の n が џ(ŋ) で表記されているものがある。そのほか、y-w-ačyp-ačte [u-「互い」w「挿入子音」-asur「噂」-as「立つ」-te「させる」] (266 行目) のように語源分解を行って表記しているものも見られる。

原著において、技術的理由で、ネフスキーの音声表記の内 џ と џ を *y* と *n* に置き換えてあるという (Nevskii 1972: 7; ネフスキー 1991: 12)。´ は口蓋化を表しているもので、џつまり *y* は [tɕ] (ツの子音) ではなく [tɕ] (チの子音) に相当する音であると考えられる。џつまり *n* は語末にしか現れないが、音節末で破裂しない p を表していると考えられる。к も同様に破裂しない k ではないかと思われる。c は [s] (ヘボン式ローマ字の s) に対して č は [ɕ] (ヘボン式ローマ字の sh) を表すと考えられる。a-epamičjkapri (a-eramisjkapri) (182 行目) の j は無性化した i ではないかと思われる。

6. 訳注に当たって

本文は Nevskii (1972) からキリル文字表記のアイヌ語テキストを打ち込み、その現行表記変更版を加え、日本語訳をつけた。日本語訳はアイヌ語から直接日本語訳したものだが、類例がなく、不明な個所はネフスキーによるロシア語訳を参照した。ネフスキー訳を参照した個所は註で指摘しておいた。訳註に使用した文献の略称は以下の通りである。

- | | |
|----------------------------------|-----------------------------------|
| 【アイヌの祈詞】: 門別町郷土史研究会編 (1966) | 【神謡聖伝】: 久保寺編著 (1977) |
| 【アイヌの叙事詩】: 門別町郷土史研究会編 (1969) | 【神話集成 1-9】: 萱野録音・編集・著作 (1998) |
| 【虎杖丸】: 金田一 (1993[1931]b) | 【田村辞典】: 田村 (1996) |
| 【虎杖丸別伝】: 金田一 (1993[1931]c) | 【知里ハツ】: 佐藤ローマ字テキスト作成・翻訳 (2006) |
| 【奥田語彙】: 奥田編 (1999) | 【中川辞典】: 中川裕 (1995) |
| 【音声資料 1-10】: 田村、田中編著 (1984-1997) | 【人間編】: 知里真志保 (1954) |
| 【音声資料 11】: 早稲田大学語学教育研究所編著 (2000) | 【羽衣伝承】: 金田一 (1993[1960]) |
| 【萱野辞典】: 萱野 (2002) | 【バチラー辞典】: バチラー (1981) |
| 【クドネシリカ】: 門別町郷土史研究会編 (1965) | 【民博鍋沢】: 中川・遠藤 (2016) |
| 【久保寺辞典】: 久保寺 (2020) | 【ユーカラ集 1-7】: 金成筆録、金田一訳注 (1959-66) |
| 【集大成】: 萱野茂採録・解説 (2005) | 【ユーカラ集 9】: 金田一筆録・訳注 (1975) |
| 【アイヌ神謡集】: 知里編訳 (1978[1923]) | |

7. テキスト

	Menoko-jukarä	Menoko-yukar	メノユカラ
001	реп-ун-нот-ун-куру	Repunnot un kur	レブンノッの人である
002	а-корö жүпi	a=kor yupi	私の兄は
003	i-реc-па-wa	i=respa wa	私を育てて
004	рамма-кане	ramma kane	いつも
005	каткор-кане	katkor kane	変わることなく
006	ока-ан-ике	oka=an h_ike	私たちは暮らしていたが、
007	јук-џi-којки-п	yuk cikoykip	シカや
008	камуй-џi-којкип	kamuy cikoykip	クマを
009	е-аунарура	eawnarura	(兄は) 獲ってきた。
010	i-епiрка	i=epirka-	私を大切に
011	сукуп-ка-корö	sukupka ¹¹ kor	育てて
012	ока-ан ајне	oka=an ayne	私たちは暮らしているうち
013	pija-п ресу	riyap resu	二歳熊を育てた。
014	неа piјaп	nea riyap	その子グマは
015	ре-па piјa-рувене	re pa riya ruwe ne.	三年越冬した。
016	ока-ан-ике	oka=an h_ike	私たちは暮らしていたが、
017	сiне анита	sineanita	あるとき
018	ене итак-i	ene itak h_i: —	(兄は) こう言った
019	еор сетакко	“eor setakko	「本当に長いこと
020	а-кон piјaп	a=kor_ riyap	子グマを
021	а-сi-ко-piјa-ре	a=sikoriyare	養ってきた。
022	е-јаикатану	eyaykatanu-	畏れ多く
023	а-ки-кусу	a=ki kusu	思うので
024	ујмам реп-ун-ка	uymamrepunka	交易しに海を越えて行った
025	а-ки-wa не-јақ	a=ki wa ne yak	なら
026	ујмам-тоното	uymam tonoto	交易の和酒、
027	ујмам-саке	uymam sake	交易のお酒で

¹¹ 「i-e pirka / resupa kane 善美に/養育して」(【アイヌの叙事詩】410) と同じような意味だろう。sukupka は「成長させる」。

028	a-e-оманте-кусу	a=eomante kusu	お送りする
029	не-рувене-на	ne ruwe ne na	つもりであるぞ。
030	піріка-но	pirkano	きちんと
031	a-кон ріјал	a=kor_ riyap	我が子グマに
032	іпе-ре кор-ан	ipere kor an”	食べさせていなさい」
033	секор ітак-корѓ	sekor itak kor	と言いながら
034	јук ці-нок-і	yuk cihoki	シカの毛皮、
035	камуі ціһокі	kamuy cihoki	クマの毛皮で
036	ціп есікте	cip esikte	舟を一杯にした。
037	ока-ан ава	oka=an awa	そうしていると
038	сем-сетак-но	sem setakno	だいぶ長い間
039	ока-ан-корѓ	oka=an kor	暮らしていると、
040	репунногункурѓ	Repunnot un kur	レプンノッ人が
041	јам-ману-кусу	yam manu kusu	上陸するというので
042	усці-угарѓ	ussiw utar ¹²	召使いたちは
043	тара-ці-танне-тарѓ	taraci tanne tar ¹³	長い荷縄を
044	уко-сһунара	ukoehunara	探し合い
045	тара-ці-такне-тарѓ	taraci takne tar	短い荷縄を
046	уко-осура	ukoosura	放りあって、
047	сап рувене	sap ruwe ne.	浜手に下っていった。
048	кі-а-кусу	ki akusu	すると
049	не-ун-не һаве	neun ne hawe	どうしたこと
050	не-нанкора	ne nankor y_a	であろうか。
051	котан-ра-ун-куру	kotan ra un kur	村の下に住む者
052	е-ум патек	eun patek	のところへだけ
053	i-јапте-аі-јак	iyapte=an_ yak	(積み荷を) 揚げると
054	аје-ајне	a=ye ayne	(人が) 言ったあげく
055	іку кан-ау	iku kan h_ aw ¹⁴	酒宴の音や

¹² ussi-utar は ussiw と utar がつながって発音されたものと解釈した。

¹³ 中川 (1992: 42) が説明するように、この部分は、taraci tanne tar は「長い荷縄」<taraci 「背負い縄の紐(所属形) tanne 「長い」 tar 「背負い縄」のことで。二行下の taraci takne tar はその反対に短い荷縄のこと。

¹⁴ iku kan haw : 「iku (飲酒、酒盛り) kan (末) hau (声), ipe (食事) kan hau ; 遠くで酒食する声」 (【神謡聖伝】639) ; 「iku kan hau 酒宴の音が遠くきこえる / ~ ipe kane hau 遠い食事の声、遠い飲酒の声、酒宴の音遠く聞こえること」 (【久保寺辞典】110-111)。

056	іпе-канау	ipe kan h_aw	食事の音が
057	ројсе-кане	royse kane	ざわざわとしている。
058	не-ун-не-һаве-та	neun ne hawe ta	どういうこと
059	ан-ја сёкоро	an ya sekor	なのかと
060	јаіну-ан-іке	yaynu=an h_ike	私は思ったが
061	ту-пекен-һупе	tu peker_nupe	二つ（沢山）の清い涙を
062	а-јаі-ко-ранке	a=yaykoranke	私は流した。
063	кон-несі-ун	kor_nesi un	そうしている
064	ан-ан-ајне	an=an ayne	うちに
065	мо-кор-ан-а-ва	mokor=an awa	私が眠ると
066	пујар-от-та	puyar or_ta	窓のところで
067	камуі-не-кусу	kamuy ne kusu	神様であるから
068	кораці-ан оккај-по	koraci an okkaypo	そう見える若者で
069	рек-курмама	rek kurmama	髭の黒さの
070	цеар-һаіга-п	cearhayta ¹⁵ p	整わない者が、
071	пујар о-рік-тек-тек	puyar oriktektek ¹⁶	窓（のすだれ）を上げて
072	ене ітак-і	ene itak h_i : —	こう言った。
073	інкар-кусу	“inkar kusu、	「さあ、
074	там меноко	tan menoko	そこの娘よ、
075	ітак-ан-цікі	itak=an ciki	私が話すことを
076	ушоннере-јан	uwonner ¹⁷ yan	お聞きください。
077	сонно е-јупі	sonno e=yupi	本当のお兄さんが
078	е-ресу руве-ка	e=resu ruwe ka	あなたを育てたのでは
079	сомо-не ава	somo ne awa	ないのですが、
080	томісампет-ва	Tomisampet wa	トミサンペツから
081	а-еікка мат-каці	a=eikka matkaci	さらわれた女の子が
082	е-не-ва	e=ne wa	あなたで

¹⁵ rek kurmama c(i)earhayta : 「髭の黒み、未だ整わず、まだ少年くさい青年、17,18 歳頃か」（【神話聖伝】673）；
「Rékkúrmama / chieárháita 鬚の黒み/いまだとゝのはず」（【虎杖丸】467）。

¹⁶ 未詳。プヤラ・オ・リケ・カッタ「窓のすだれをさっと上げて」（【集大成】104）や「プヤラ オリコ=窓を開ける（簾を巻き上げる）」（【萱野辞典】185）が同じような表現と思われる。ネフスキーのロシア語訳は「窓を開けて」とある。

¹⁷ uwonner : 「よく聞く」（【田村辞典】815）という意で用いられるが、沙流川下流域に限られるようである（【神話聖伝】607 など）。

083	a-e-pecy-rywe	a=e=resu ruwe	あなたが育てられ
084	he-jakun	ne yakun	たなら
085	e-poro jakun	e=poro yakun	あなたが大きくなったら
086	repunnotunkuryŭ	Repunnot un kur	レブンノッ人は
087	e-kor kusu	e=kor kusu	妻にするため
088	e-pecy rywe	e=resu ruwe	あなたを育てたの
089	he-a-wa tap	ne awa tap	のですが、
090	ujmam janke	uymam yanke	交易の品を陸揚げ
091	ki-awa	ki awa	すると
092	kotan-ra-un-mat	kotan ra un mat ¹⁸	村の下に住む女性が
093	pis-yi-jakura	pisun_ yakura	浜にある櫓、
094	jakura kurŭ-ka	yakura kurka	その櫓の上に
095	c-ouci-hawe	cousi ¹⁹ hawe	のぼり立って
096	ene an-i	ene an h_i : —	こう言ったのです。
097	ŝoma-okai-pe	“somo okay pe ²⁰	『決して、
098	ŝino-utarpa	sino utarpa	真の立派な男性は
099	ŝi-egok-uŝ-pe	sietok us pe	待ち受けていることを
100	ŝomo nu-no	somo nu no	知らずに
101	uni-hi ko-ŝirepa	unihi kosirepa! ²¹	家へ戻られませんよう。
102	he-wa kus-tap	ne wa kus tap	それだからこそ、
103	hawe-an-an-na	hawean=an na	私は言うのです。
104	nepe-e-kar-kusu	nep h_e e=kar kusu	何をするためにか
105	e-uko-hoppa-p	e=ukohoppa p ²²	あなたが一緒に残した
106	e-kon rijan	e=kor_ riyap	子グマと
107	e-kot turesi	e=kor_ turesi	妹は
108	uko-ŝeta-he	ukosetane ²³	犬のような振る舞いをして

¹⁸ Philippi (1979: 276) では Kotanpa-un-mat 「村の上端に住む女性」となっている。

¹⁹ 「yakura kurka / chioushi 櫓の上にのぼり立ち」「o-『尻』ushi 『つける』」(【ユーカラ集 1】301)。

²⁰ 「ako-upaskuma / somo okaype 昔語りするものではない」(【アイヌの叙事詩】32) ; 「somo okay pe してはならないこと」(【神話集成 9】38)。101 行目にかかると思われる。

²¹ 97 行目からここまで Philippi (1979: 276) には「偉大な首領であるあなたが、そこに待ち受けているものを知らずに自分の家に帰りはすまいかと」とある。

²² e=ukohoppa p と e=kor riyap, e=kor turesi は同格。井筒編 (2004 : 398) の p の項目参照。

²³ ukosetane : 「兄妹で夫婦になる」という意味で「アイヌ社会では親子や兄妹でそのような噂だけでもあつてはならないこととされる。万が一にもそのような噂が立ったとしたらあの者たちは犬になったと言って最も軽蔑されるという」(【萱野辞典】104)。

109	e-сѣмпір-орке	e=sempirorke	あなたの蔭で
110	e-ко-сѣмо-куру	e=kosomokur-	あなたに対して
111	јаікатану	yaykatanu ²⁴	無礼なことを
112	кі-рууене-на сѣкорѳ	ki ruwe ne na" sekor	しているのです』と
113	hotuj-па рууене	hotuupa ruwe ne ²⁵	叫んだ。
114	newa-ампе-кусу	newaanpe kusu	そのため
115	котанра ункуру	kotan ra un kur	村の下に住む者
116	e-ун і-јапте-ам-ма	eun iyapte=an w_a	のところへ積み荷を揚げて
117	іпе кан-аве	ipe kan h_awe	食事の声や
118	іку кан-аве	iku kan h_awe	酒宴の声が
119	i-сі-ко-нуре	i=sikonure ²⁶	私の方に聞こえてくる。
120	нісат-та анақ	nisatta anak	次の日には
121	a-i-j-уко-ронну	a=i=ukoronnu	私達は皆に殺される
122	кі-кусуне јак	ki kusu ne yak	ことになっていると
123	aje рууене на	a=ye ruwe ne na!	(人は)言っているのです。
124	нісат-та ан-цікі	nissatta an ciki	次の日になったら
125	пікај-сіпіне	pikan_ sipine	素早く身支度を
126	e-j-ai-каракарă	e=yaykarkar	あなたがして
127	оро-ва	orowa	それから
128	не-ун-не-не	neun hene	どのように
129	ікі-анакка	iki=an y_akka	私がしても
130	ітекі	iteki	決して
131	i-сітома-но	i=sitoma no	私を怖がらずに
132	i-сѣмпір-орке	i=sempirorke	私の陰に
133	e-котук-котук	e=kotukkotuk	ぴったりくっついて
134	сѣмо-кі јакун	somo ki yakun	いなければ
135	e-сікну рууе	e=siknu ruwe	あなたは生きては
136	сѣмо тапан-на	somo tapan na!	おれないのです」

²⁴ kosomokur-koyaykatanu : 「[雅](人)に対して無礼なことを言う/する」(【田村辞典】341)。moshir-kor kamui / sembirke / kosomokur- / yaikatanu hawe / katkoro hawe / okai awa 国の守り神/の蔭に/失礼な/畏れはばからぬことを/平気に言い/くさったのに」(【ユーカラ集 6】146)。

²⁵ 魚井の指摘するように、この発言はレブンノッ人を慕って主人公に嫉妬しているからなされたのかもしれないが(ネフスキー1991: 91)、久保寺版では敵の子孫であるからと述べられている(Philippi 1979: 276)。

²⁶ sikonure : 「自らに～を聞かせる」か; 「ishikonure 聞いてみる=anu kane kor」(【久保寺辞典】122)。

137	ésekor itak-korō	sekor itak kor	と言いながら
138	пујар опіці пекорō	puyar opici pekor	窓を放したように
139	јаіну-ан-корō	yaunu=an kor	思うと、
140	мо-сан руwене	mos=an ruwe ne	目が覚めた。
141	оро-wa-несі	orowa nesi	それから
142	hopuni-ам-ма	hopuni=an w_a	私は起き上がって
143	піріка сyке	pirka suke	おいしい料理を
144	а-кі-wa	a=ki wa	作って
145	а-кон ріјал	a=kor_ riyap	自分の子グマに
146	а-іпере руwене	a=ipere ruwe ne.	食べさせた。
147	оро-wa-несі	orowa nesi	それから
148	а-кар-wa ампе	a=kar wa an pe	自分が刺繍したものの
149	піріка hіке	pirka hike	良いものを
150	а-утомціуре	a=utomciwre	身に着け、
151	ісам-пе сі-јук	isam pe siyuk	死人の装束、
152	рај-пе сі-јук	ray pe siyuk	死者の装束を
153	а-јaj-екарāкарā	a=yayekarkar	身に付けた。
154	рапокке-та	rapokke ta	その間に
155	hajok numikiri	hayok numikiri ²⁷	鎧をまとう者どもが
156	укага терēке	ukataterke ²⁸	押し合いへし合い、
157	а-кон ріјал	a=kor_ riyap	私の子グマは
158	сет-цат-тек-теқ	set cattedek	檻をパツと壊して
159	ці-сој-екатта	cisoyekatta	飛び出した。
160	а-сінума-ка	asinuma ka	私も
161	сој-о́сма-ам-ма	soyosma=an w_a	外へ出て
162	неа ріјал	nea riyap	その子グマの
163	сеппір-орке	sempirorke	陰に
164	а-котук-котуқ	a=kotukkotuk	ぴったりくつついた。
165	ук-wa ампе	uk wa an pe	子グマは、捕らえた者は

²⁷ numikir : num 「群れ？」 ikir 「列」；「hayok numikir / ukataterke 鎧をまとう集団が/互に踏みにじる」（【ユーカラ集 1】195）；「inne numikir / ikopiwpa kor 多数の軍勢が/われを追いまくれば」（【アイヌの叙事詩】177-178）；「hayok numikir / ukataterke 鎧の列が/押し合いへしあいし」（【民博鍋沢】113）。

²⁸ ukataterke ; u- 「互いの」 ka 「上」 ta 「に」 terke 「跳ぶ」；「相踏みにじる」（【ユーカラ集 1】195）；「互いに重なり合う」（【アイヌの叙事詩】525）；「押し合いへしあい」（【ユーカラ集 9】89）。註 27 参照。

166	но́ске ту́је	noske tuye	真ん中を切り
167	окке́ве кекке́	okkewe kekke	腰を折り
168	вем пара́пара́к-ау	wenparaparak h_au	大声で泣き叫ぶ声が
169	ца́ро́сіру́ці	carosirusi ²⁹	響き渡った。
170	оп-ко́н-ну́мі	op kor_ numi ³⁰	槍を持つ群衆が
171	сі́нна-ка́не	sinna kane ³¹	別々に
172	ку-ко́н-ну́мі	ku kor_ numi ³²	弓を持つ群衆が
173	сі́нна-ка́не	sinna kane	別々にいた
174	кі-п-не́ ко́рѡ-ка	ki p ne korka	のだが
175	оп-у́туру	op utur(u)	槍の間を
176	а́ј-у́туру	ay utur(u) ³³	矢の間を
177	е-сі́-не́не	esinene ³⁴	(子グマは) 避けた。
178	і́не-ро́к-пе-ку́су	inerokpekusu	なんとまあ、
179	ро́румпе-ка́тса́м	rorunpe katsam ³⁵	戦いぶりの
180	е-а́скаі́-ка́спа	easkay kaspа	見事な
181	сі́рі-кі́-жа́ка	sirki ya ka	様子であるか
182	а-е́рамі́сі́ка́рі	a=eramiskari	分からないほどだ。
183	кі́-ро́к-а́јне	ki rok ayne	そうして
184	се́га-кі́кі́рі	seta kikiri ³⁶	犬につく虫 (まで)
185	у-в-а́су́р-а́сте	uwasuraste	噂を立てる (もの) を

²⁹ carosirusi は類例が見つからないが、ネフスキーのロシア語訳「ひどいうめき声が聞こえる」を参考に「響き渡った」と訳した。

³⁰ op kon(<kor) numi : 「op kon numi 槍持つ群」(【ユーカラ集9】209) 「op kor numi 槍を持つ群は」(【クドネシリカ】66)。註27も参照。

³¹ ~ sinna kane ~ sinna kane : 「～は別々に～は別々に」(大勢いることを表わす常套句)(【中川辞典】228)。「emus kor pe sinna kane op kor pe sinna kane hine 刀を持つものは別々に、槍を持つものは別々に(=刀を持つ一団がおり、それとは別に槍を持つ一団がいる)」(【中川辞典】228) ほかには【クドネシリカ】66頁や【民博鍋沢】329頁に同様の例がある。

³² 註27, 30参照。

³³ 「Ai-utur / aeshinere 矢の間を / われ身をひらけば」(【虎杖丸】250) ; 「ay utur / a-esine kor 矢の間 / われ飛びかわすと」(【アイヌの叙事詩】580) ; 「ay utur / op utur / a=esinene 矢の間 / 槍の間を / 私は避ける」(【民博鍋沢】330)。ただし、rの後に母音が付加されたものもある(【ユーカラ集2】443)。

³⁴ a=esinene : 「a (我) e (そこ、矢の間) shi (自身) nene (回転す) shinene は shikuru の意」と解釈されている」(【虎杖丸】250)。

³⁵ katsam : katcam という語形が一般的だと思われるが、「katsam 性質 <kat(u)-sam, >katcham」(【久保寺辞典】141) という記述もあるので、katsam とした。

³⁶ 「seta kikirih / u-asuraste / a-eseske kar 犬の虫けらまで/評判を立てるもの/われ斬りすてる」(【アイヌの叙事詩】308)。この表現は「大将はいうに及ばず雑輩のはてまで一人のこらず (のこれば、これを話のたねに雑輩は噂を立てるもの故うるさいからと、犬にたかる虫のはてまで) 生きとし生けるものをみな打殺した」(【虎杖丸】411) という意味。

186	е-ке́ске-кара	ekeskekar ³⁷ .	殺しつくした。
187	оро-ва не́сі	orowa nesi	それから
188	пи́с-та са́п-ан	pis ta sap=an	私たちは浜へ下りた。
189	ене-не пекорѐ	enene pekor	(すると) このように
190	хе́се-па-ха	hese paha	(子グマの) 息づかいが
191	а-ну-һи та́п-не	a=nu hi tap ne	聞こえてきた。
192	е-о́немо́сірі	“e=one mosir(i) ³⁸	「あなたを故郷に
193	а-е-ору́ра-кусу	a=e=orura kusu	お連れする
194	не-ру́вене-на	ne ruwe ne na	つもりです。
195	і-кі́сма се́корѐ	i=kisma” sekor	つかまっていなさい」と
196	не-пекоро	ne pekor	いうように
197	хе́се-һаве	hese hawe	息する声が
198	а-ну һи́не	a=nu hine	聞こえて
199	ату́ј-ка о́сма	atuy ka osma	海に出た。
200	оро-ва-но	orowano	それから
201	а-кі́сма-ва	a=kisma wa	私はつかまって
202	і́не-һуна́к-ун	ine hunak un	どこかへ
203	па́је-ан а́јне	paye=an ayne	進むうち
204	са́н-о́та куру́-ка	sanota kurka	浜辺の砂浜の上(渚?)に
205	ко-ц-е-ја-о́тке	koceyaotke ³⁹	(子グマは) 乗り上げた。
206	оро-ва-но	orowano	そうして
207	ја́і-хе́сере-ко́рѐ	yayhesere kor	ホッとひと息ついて
208	о́ка-ан а́јне	oka=an ayne	いるうちに
209	хе́се-па-ха	hese paha	(子グマの) 息づかいが
210	ене-не-пекорѐ	enene pekor	このように (聞こえた)
211	та́м поро́ пет	“tan poro pet	「この大きな川に
212	а-ту́расі́ ја́кун	a=turasi yakun	沿って上って行くと
213	су́і	suy	また

³⁷ ekeskekar : 「ekeshkekar 殺し絶やす」(【久保寺辞典】61)。

³⁸ ロシア語訳は「お前が住んでいた国へ」とある。one は場所をとる接頭辞 o が ne 「～である、～になる」に付加されたものか。なお、向かう先は娘がもともといたはずのシヌタプカ (この話ではトミサンペツとしか語られていないが) である。

³⁹ koceyaotke : ～に上陸する (?) 「sanota kurka / a=koceyaotke 砂浜の上に/乗り上げた」(【民博編訳】326)。ceyaotke は「岸へ着く : 舟の頭が岸へ突き刺さるようになって着く」(【萱野辞典】301)。

214	тумі-ко-ока-куні-п	tumikooka ⁴⁰ kuni p	戦いに遭うものが
215	а-не руwене-на	a=ne ruwe ne na	私たちなのだ。
216	сіне цініка-ка	sine cinika ⁴¹ ka	一步でも
217	і-ј-ојакке-хе	i(y)=oyakkehe	私のいないところに
218	е-о́сма јакне	e=osma yakne	あなたが出ると
219	е-сікнy-куні- п	e=siknu kuni p	助かるものでは
220	сoмо-не-на сeкoрѳ	somo ne na” sekor	ないのだ」と
221	не-пекoрѳ	ne pekor	いうように
222	heće-hawe	hese hawe	息をする声を
223	а-ну-кoрѳ	a=nu kor	聞きながら、
224	opo-wa heći	orowa nesi	そうして
225	пет тyрасі	pet turasi	川に沿って
226	пaje-ан aјне	paye=an ayne	ずうっとのぼって行くと、
227	інне катан	inne kotan ⁴²	人口の多い村が
228	цісіреанy	cisireanu	立ち並んでいた。
229	кoгај-соі	kotan_ soy	村の外れに
230	а-о́сма-awa	a=osma awa	着くと
231	weј-сета-мік-ay	wen_ seta mik h_ aw	恐ろしい犬の鳴き声が
232	царoсірусі	carosirusi ⁴³	響き渡った (?)。
233	тата-отта	tata or_ ta	そのとき
234	кoтан-утуру	kotan utur(u)	村の間を
235	haw-сітаікі	haw sitayki ⁴⁴	騒ぎに騒ぐ
236	кі-hawe	ki hawe	声が
237	ене ан-і	ene an h_i : —	こう聞こえた。
238	репуннот-та	“Repunnot ta	「レプンノッで
239	yкo-сета-не	ukosetane	犬のような振る舞いを

⁴⁰ tumikooka は tumikoan の複数形。koan は「ko-「そこへ」 an「在る」、(いくさが)「寄せて行く」(【ユーカラ集 2】303) ; 「wen kamui tumi / ko-an katuhu / sakpa iwampa / matapa iwampa (魔人の戦/我等に挑み来て/夏の年六年/冬の年六年)」(【神謡聖伝】293、下線は筆者)。

⁴¹ cinika : 「chinika 足踏」(【久保寺辞典】42)。

⁴² 久保寺版によればこの村はイシカラ Ishikar [ママ] である。

⁴³ carosirusi : 類例は見当たらないが、ネフスキーのロシア語訳「響く」を参考に「響き渡る」とした。

⁴⁴ haw sitayki : 直訳は「声が～を叩く」。「知らせが来る : 凶報が来る」(【萱野辞典】370) ; 「大騒ぎに騒ぐ」(【久保寺辞典】85)。「kotan uturu / haushitaiki 村の間/大さわぎにさわぎ」(【ユーカラ集 8】241)。Kotanatur haushitaiki 村中は大さわぎ」(【アイヌ神謡集】80-81)。

240	кiккi-тaсi-тa	kikki tasi ta ⁴⁵	ただけでなく (?)
241	кoтaн вeнтe яk	kotan wente yak	村を荒したと
242	aje-рoк-пe	a=ye rok pe	いうものが
243	aрki-сiрi	arki siri	やってきて
244	нe-нa	ne na	いるぞ。
245	hokure кунақ	hokure kunak	さあ早く
246	уко-рoнну-ян	ukorunnu yan!"	皆で殺しなさい」
247	сeкoр-aм-пe	sekor an pe	ということを
248	e-сi-кoтaм-нa	esikotanpa-	村の先まで
249	пaвeтeнкe	pawetenke.	命じた。
250	opo-wa-нo сyи	orowano suy	それからまた
251	hajok нумiкiрi	hayok numikiri ⁴⁶	鎧を着た群衆が
252	укaтa тeрeкe	ukataterke ⁴⁷	押し合いへし合いし、
253	сeнрaм-сeкoрo	senramsekor	前と同じく
254	ук-wa aмпe	uk wa an pe	捕らえた者の
255	нoскe тyje	noske tuye	真ん中を切り
256	okkewe кeккe	okkewe kekke	腰を折り
257	сeмпiр-oркe	sempirorke	(子グマの) 陰に
258	a-кoтyк-кoтyк	a=kotukkotuk	私はぴったりくつついた。
259	iнe-ап-кyсy	ineapkusy	何とまあ
260	рoрyмпe-кaтcам	rorunpe katsam ⁴⁸	戦いかたが
261	e-aсkaj-кaспa	easkay kaspa	巧みな
262	сiрi-ki-jaka	sirki ya ka	様子であるのか
263	a-epamiсiкapи	a=eramuskari	分からないほどだ。
264	ki-рoк ajne	ki rok ayne	そうして
265	сeтa-kiкiрi	seta kikiri	犬にたかる虫 (までも)
266	y-w-aсyр-aстe	uwasuraste	噂を立てる (もの) を
267	e-кeскe-кapя	ekeskekar ⁴⁹	(子グマは) 殺しつくした。
268	opo-wa сyи	orowa suy	それからまた

⁴⁵ 未詳。ネフスキーによる訳でも (?) が付されている。ここでは文脈に遭うように「～するだけでなく」

⁴⁶ 註 27, 30 参照。

⁴⁷ 註 27, 28 参照。

⁴⁸ 註 35 参照。

⁴⁹ seta kikir uwasuraste ekeskekar は註 36 参照。

269	пет-тураці	pet turasi	川に沿って
270	паје-ан ајне	paye=an ayne	ずっと上って行くと、
271	ојак-ва ек пет	oyak wa ek pet	他のところから来る川、
272	пет-етоко	pet etoko	その川の水源に
273	а-іјорапте	a=i(y)=orapte ⁵⁰	私たちはたどり着いた。
274	пет-пеś-сап-ан	pet pes sap=an	川に沿って下っていくと
275	пірка пом-пет	pirka pon pet	美しい小川、
276	пет-пугу-һу	pet putuhu ⁵¹	その川の河口に
277	камуі-каря тапкоп	kamuy kar tapkop	神様がつくった丸山が
278	цоероśкі	coeroski ⁵²	そびえている。
279	тапкоп-касі	tapkop kasi	その丸山の上に
280	камуі-кат цасі	kamuy kar_ casi	神様のつくった城が
281	оуś-руконна	ous ru konna	建っている様子は
282	меунатара	mewnatara	堂々としている。
283	неа тапкоп	nea tapkop	その丸山に
284	а-ко-һемеś-на ⁵³	a=kohemespa(?)	私たちは登った。
285	цісе сој-га	cise soy ta	家の外側に
286	паје-ан ајке	paye=an ayke	私たちが行くと
287	а-кон ріјап	a=kor_ riyap	私の子グマは
288	інау-ціпа отга	inawcipa or_ ta	幣棚のところに
289	арпа һіне	arpa hine	行って
290	мо-но а-ва ан	mono a wa an.	きちんと座っている。
291	а-сінума анакне	asinuma anakne	私は
292	мімтар ката	mimtar ka ta	外庭で
293	ціś-ан-корō	cis=an kor	泣きながら
294	а-ан-ма	a=an w_a	座って
295	ан-ан аіке	an=an ayke	いると、

⁵⁰ orapte に一人称目的格人称接辞 i=がついて iyorapte となっている。動詞の原形が分かりやすいよう、ここでは i(y)=orapte と表記した。a=i(y)=orapte で「私たちは下ろされた (<人が私たちを下ろした)」だが、文脈に合うよう「私たちはたどり着いた」とした。

⁵¹ 久保寺版では河口ではなく険しい崖の頂きのようなのである。

⁵² cioeroski と同じ。「Chioeroshki, v.i. To stand out in separate shafts. (iike rays of iight).」(【バチラー辞典】83)；

「chioeroshki 立つ。起立つ /tu peket chupki ~」(【久保寺辞典】43)；「[c-6-e-roski (中相)・その尻・そこに・・・を立てる]」(【音声資料11】49)。

⁵³ a-ко-һемеś-на とあるが、a-ко-һемеś-па の誤植と思われる。

296	ці́се оннаі	cise onnay	家の中で
297	хум-у́с кане	hum us kane	音がした。
298	аіне	ayne	すると
299	аіну со́јне	aynu soyne	人が出てきた。
300	інкар-ан ру́ве	inkar=an ruwe : —	目をやると
301	пои рек-по у́с-кане	pon rekpo us kane	うっすらと髭を生やした
302	а́јну хетап	aynu hetap	人間なのか
303	неп-не куні- <i>n</i>	nep ne kuni p	何者なのか
304	кане отоп	kane otop ⁵⁴	黄金の髪毛、
305	мореу-не отоп	morew ne otop	渦を巻いた髪、
306	е-кіму́ј-касі	ekimuy kasi	その頭の上が
307	тонна-гара	tonnatara	輝いていた。
308	со́іне híне	soyne hine	(その人が) 外へ出てきて
309	і-куру́ў-касі-ке	i=kurkasike	私の様子を
310	у́вампаре	uwanpare	じっと見た。
311	е-рон-не- <i>wa</i>	eronne wa	上座のほうに
312	сі́р-уванте	siruwante	注意深く目をやって
313	а-кор каму́і	a=kor kamuy	私のクマを
314	нукар híне оро- <i>wa</i>	nukar hine orowa	見てから
315	хетопо а́хун	hetopo ahun	また入った。
316	сі́р-ан а́јне	siran ayne	しばらくすると
317	хетоно со́јне	hetopo soyne	また出てきて
318	ці-но́је інау	cinoye inaw	撚りのあるイナウを
319	каму́і кар се́ппа	kamuy kar seppa	神様の作った鏢に
320	оро-ун híне	oro un hine	つけて
321	корḡ- <i>wa</i> арпа	kor wa arpa	持って行った。
322	а-кон рі́јал	a=kor_ riyap	私の子グマの
323	реку́ці-коте-корḡ	rekuci kote kor : —	首に付けながら、
324	па́се каму́і	“pase kamuy	「尊い神様が
325	реу́сі і́waje	rewsi iwaye	お泊りするお礼を
326	а-коре-сі́рі	a=kore siri	差し上げる

⁵⁴ 日本語訳は「kane otop 黄金の頭髪」(【神謡聖伝】238) とあるのに従った。

327	не-на сѣкорѣ	ne na' sekor	のですよ」と
328	hawе-ан-корѣ	hawean kor	言いながら
329	рекуци коте	rekuci kote	首に付け、
330	оро-wa несі	orowa nesi	それから
331	а-кон ріјап-ка аһун	a=kor_ riyap ka ahun	私の子グマも(家に)入り
332	i-j-аһунте ману-һи	i(y)=ahunte manu hi	私を入れるということ
333	анрека-каря	an=rekakar ⁵⁵	承諾してくれた。
334	аһун-ан рувене	ahun=an ruwe ne.	私は家に入った。
335	апа а-ко-сікірү-wa	apa a=kosikiru wa	戸口の方に体を向けて
336	а-ан-ма	a=an w_a	座って
337	інкар-ан-іке	inkar=an h_ike :	目をやったが、
338	цисе отта	cise or_ ta	家の中に
339	інампє-намне	inanpe namne ⁵⁶	なんと立派な
340	пон-ајну пон-курү	pon aynu pon kur ⁵⁷	若者、少年が
341	ан-нанкора	an nankor y_a	いらっしゃるのだろうか。
342	рек-курү-мама	rek kurmama	髭の黒みが
343	цїєарăһайта	cierhayta ⁵⁸	まだ整わず
344	ірі-пє со-не	iripe sone	(同じ) 一族の者らしく
345	ірі-сік-пуј-по	iri sikpuypo ⁵⁹	一族の目元を
346	уко-арі	ukoari	備えた方が
347	ока рувене	oka ruwe ne	いらっしゃった。
348	іне-рок-пє-кусу	inerokpekusu	何とまあ
349	ніспа-не wa	nispa ne wa	長者である
350	сірокаја	sir oka ya	様子なのか(分らぬほど)
351	тан-іјоікірі	tan iyoykir	その宝壇は
352	рам-пєс-кун-не	rampes kunne	海岸の斜面のように

⁵⁵ an=rekakar は「人がほめる (=褒められる)」ということだろうか。“Asikay an ruwe,, / anreka kar / i-ekopuntek (『上手だなあ』とほめてくれ/喜んでくれて)」(【アイヌの叙事詩】373) や「askay-an ma! an-rekakar (『あなたは針仕事が上手だねえ。素晴らしいねえ、(と言って)』) (【知里ハツ】89) という例がある。

⁵⁶ inanpe namne : 「なんとりっぱに」(【羽衣伝承】67, 68) ; 「inanpe (疑問代名詞『どれ』『なに』『何と』) namne (語強勢助詞『まあ』『本当に』くらいの意) ; いかなるものであろうか、本当に」(【神謡聖伝】666)。

⁵⁷ Poууаunpe のことを pon aynu 「若者」 pon kur 「少年」と呼んでいる。

⁵⁸ rek kurmama c(i)earhayta は註 15 参照。

⁵⁹ 似た表現に「irpe sone / shine sikbui / shine rachiu / ukoturpa kane 一族のものらしく/一つ目つき/一つ眉つき/相のべて」があり、「互によく似ていることを表している」(【ユーカラ集 3】172)。【ユーカラ集 6】53 頁では irpe ではなく iribe [=iripe] とある。

353	цiсiтyрiпe	cisituriре	長く伸びている。
354	eн-кaсi-кe	enkasike	その上には
355	нiсnа-мyт-пe	nispa mutpe	長者の佩くような刀があり
356	o-тy-сaн-тyкa	otu santuka ⁶⁰	何本も柄が
357	o-уkаyрy	oukauyru	重なるようである。
358	o-тy-пyсa-кyрy-	otu pusakur	二つの (たくさんの) 房を
359	сyј-пa-кaнe	suypa kane	揺らしている。
360	aн-рaмaсy	an=ramasu	面白く
361	a-уwесyе	a=uwesuye ⁶¹	心楽しい。
362	кaт-мaг кaмyи	katmat ⁶² kamuy	あなた様は
363	epоннe сiнy	“eronne sinu	「横座の方へずって来なさい
364	нe-ун-iki-wa	neun iki wa	どういうわけで
365	нeи-wa ек-пe	ney wa ek pe	どこから来た者で
366	e-нe руwе-aн	e=ne ruwe an?”	あなたはあるのですか」
367	сeкop hawе-oкa	sekor haweoka	と言った。
368	тaмпe-кyсy	tanpe kusu	そのため
369	тaп-нe кaнe	“tapne kane :	「こういうわけで
370	a-кop јyпi hene	a=kor yupi hene	自分の兄かが
371	i-рeсy руwе	i=resu ruwe	私を育てたの
372	нe кyнaқ	ne kunak	だと
373	a-рaмy-wa	a=ramu wa	思って
374	рeпyннoт-тa	Repunnot ta	レブンノッで
375	a-i-рeсy-awa	a=i=resu awa	育てられていたのですが
376	тa-aн рiјaл	taan riyap	この子グマが
377	рe-пa рiјa-wa	re pa riya wa	三年、冬を越して
378	yјмaм-тoнoтo	‘uymam tonoto	『交易の和酒、
379	yјмaм-сaкe	uymam sake	交易の酒で
380	a-e-omante кyсy-нe сeкopō	a=eomante kus ne‘ sekor	お送りしよう』と
381	рeпyннoт-ун-кyрy	Repunnot un kur	レブンノッ人が

⁶⁰ santuka : 刀の柄。「語り手によれば、かけてあるときに santuka といい、抜くときは nipihi 《柄、ついている棒》という」(【音声資料 7】 17)。

⁶¹ an=ramasu a(n)=uwesuye 「おもしろく心楽しい」(【音声資料 7】 17) という意味で、韻文で多く用いられる。

⁶² katkemat と同じだろうか? katmat kamuy のロシア語訳は「女神」となっている。

382	hawe-an-korō	hawean kor	言いながら
383	i-hoppa-a-wa	i=hoppa awa	私を置いていったのですが
384	neunnewa-neja	neun ne wa ne ya	どういふことなのか
385	jan-hike-ka	yan hikeka	舟が(戻って)上がっても
386	kotan-ra-un-kurŷ	kotan ra un kur	村の下に住む男
387	e-um pateq	eun patek	のところにだけ
388	ijapte-an-hi	iyapte=an hi	荷卸しをさせていることを
389	a-nu ajne	a=nu ayne	聞いているうちに、
390	ipe-kan-au	ipe kan h_aw	食事をする声や
391	iku-kan-au	iku kan h_aw	酒宴の声を
392	a-nu-korō	a=nu kor	聞いて
393	oka-an ajne	oka=an ayne	過ごしていますと
394	a-kon rijal	a=kor_ riyap	私の子グマが
395	i-pirīma hawe	i=pirma hawe :	危険を知らせてくれました。
396	kotan-ra-um-mat	kotanraunmat	『村の下に住む女は
397	repunnot-un-kurŷ	Repunnot un kur	レプンノッ人が
398	jan-ekari	yan ekari ⁶³	上陸する先に
399	hotuypa hawe	hotuypa hawe	こう叫び声を
400	ene-an-i	ene an h_i : —	あげた。
401	ne-pe e-kar kusŷ	nep h_e e=kar kusu	『何をするためにか
402	e-oasir-unte-p	e=oasirunte p ⁶⁴	留守番をさせた
403	e-kon rijal	e=kor_ riyap	あなたの子グマと
404	wem-menoko	wen menoko	悪い女が
405	uko-śeta-ne	ukosetane	犬の如き振舞をすることで
406	e-śempir-orke	e=sempirorke	(二人は) あなたの陰に
407	e-ru-kus-pa-pe	erukuspare ⁶⁵	道を通して
408	ki-ruwene-na śekorō	ki ruwe ne na ⁶ , sekor	いるのです、と

⁶³ 「tono-mosir wa / ku yan ekari (和人の地より/われ帰り来て)」(【アイヌの祈詞】87) ; 「ekor aynu / akor yupi / koasurani / taranpe kusu / eyan ekari / ranan katu / nehi tapan na (汝の父が/私の兄に知らせたために/汝が上陸する先に/私が降ったこと/なのです)」(【アイヌの叙事詩】606、下線は筆者)。

⁶⁴ oasirunte は「オハシリウンテ 留守番させる」(【萱野辞典】177) と同様の語。ここでは e=ohasirunte と e=kor riyap, wen menoko が同格になっている。註22参照。

⁶⁵ 中川(1992: 44)によれば「熊と女が、姦通することで以て、あなたの陰に道を通す」、つまり「熊と女があなたに隠れてこそこそといまわしい行為をしている」ということであるとされる。

409	hotuҗпа-wa	hotuypa wa	叫んだ
410	кусу тап-тап	kusu taptap	ために
411	i-j-oјакке-та	i(y)=oyakke ta	私たちのいない所で
412	iku-an hawe	iku an hawe	酒宴が
413	не-ајне	ne ayne	あったあげく
414	нісатта анақ	nisatta anak	次の日に
415	a-j-уко-ронну	a=i=ukoronnu	私たちは皆に殺される
416	кі-кусуне јак	ki kusu ne yak	ことになっていると
417	аје-рувене-на	a=yе ruwe ne na	(人が)言っているのです。
418	ікі-ан-і-не-но	iki=an h_i neno	私がするように
419	e-ікі нанконна	e=iki nankor_ na.	あなたはするのですよ。
420	томісампет-wa	Tomisanpet wa	トミサンペツから
421	a-e-ікка мат-каці	a=eikka matkaci	さらわれてきた女の子が
422	e-не a-кусу	e=ne a kusu	あなたであったので
423	e-o-не-мосірі	e=one mosiri ⁶⁶	あなたの生地へ
424	a-e-орура-на сескорѳ	a=e=orura na!‘ sekor	お連れするのです』と
425	акор камуі	a=kor kamuy	私のクマが
426	hawe-an-korѳ	hawean kor	言いながら
427	a-тура awa	a=tura awa	私は連れ立っていくと、
428	аркі-ан ру-томо-та-ка	arki=an ru tomo ta ka	来る途中にも
429	тумі-ко-ока	tumikooka ⁶⁷	私たちは戦いに遭遇し
430	ан-ајне тасі	=an ayne tasi	しばらくしてやっど
431	аркі-ан руве	arki=an ruwe	(ここに) やって来たの
432	анне(қ) сескорѳ	an ne(k)‘ sekor	です』と
433	ітак-ан awa	itak=an awa	私が言うと
434	туре́-по сескорѳ	“turespo!	「妹よ、
435	сампе-по сескорѳ	sampepo” sekor	心臓(愛する者)よ』と
436	hawe-oka-korѳ	haweoka kor	言いながら
437	i-ката рај-ранке	i=ka ta ray ranke ⁶⁸	私を死ぬほどに抱きしめて

⁶⁶ 註 38 参照。

⁶⁷ 註 40 参照。

⁶⁸ 「イ=カ タ ライ ランケ 私のの上に死ぬほどに」(【神話集成 6】 68) ; 「カシ・タ ライ・ランケ (上・に 死に・ながら)。お互いに抱き合い、相手の上で息絶えるほどに喜ぶようすを言っている」(【集大成】 197)。

438	цiс-ан руwене	cis=an ruwe ne.	私たちは泣いた。
439	оро-wa неci	orowa nesi	それから
440	а-кор камуi	a=kor kamuy	私のクマに
441	ко-онкаmi-роқ	koonkami rok	拝みに
442	онкаmi-руwене	onkami ruwe ne	拝んだ。
443	оро-wa-но	orowano	それから
444	а-јуп-утарi	a=yuputari	私の兄たちは
445	саке етоко-iкi	sake etokoyki	酒宴の支度をし
446	а-кон рiјал	a=kor_riyap	私の子グマの
447	етоко-а-о-iкi hine	etoko a=oyki hine	(送りに向けた) 準備をし
448	тане анакне	tane anakne	今はもう
449	а-арпа-ре-hi	a=argpare hi	お送りするときに
450	уwепа-руwене	uwepa ⁶⁹ ruwe ne.	なった。
451	а-паc-те hike	“a=paste hike	「走らせるものが
452	ан-куc тап-не	an kus tapne	あったからこそ
453	е-сiкну кунi-п	e=siknu kuni p	お前は生き残ったが
454	е-кор камуi	e=kor kamuy	(子グマは) お前の神で
455	не awa ceкopб	ne a wa!" ⁷⁰ sekor	あったのだ」と
456	јaину-анг куcу ⁷¹	yaynu=an kusu	私は思ったので
457	ту-пекен-нуpe	tu peker_nupe	二つの(沢山の) 清い涙を
458	а-јai-ко-ранке	a=yaykoranke	私は流した。
459	ки-рок awa	ki rok awa	すると
460	iнау-цiпа-ката	inawcipa ka ta	幣棚に
461	неа оккајпо	nea okkajpo	その若者が、
462	тане-ам-пiкpика	tane an pirka ⁷²	今ある美しさが
463	ciјоторанне	siyotoranne ⁷³	かつてない程で、
464	тане-не-куcу	tane ne kusu	いまでは

⁶⁹ uwepa : 「уера【動1】(～という状態に) 達する」(【中川辞典】53)。名取(1941:81)にも uwepa が見られる。

⁷⁰ このセリフの中の e=は自分に対して用いている。この部分は Philippi (1979: 293) では「子グマのおかげで、お前の命は救われた。そして今、お前はもう二度と子グマに会えないということだ。」とある。

⁷¹ ここはなぜか jaиnu-анг куcуではなく jaиnu-анп куcуとなっている。

⁷² tane an pirka : 「いつもの美しさ」(【久保寺辞典】319)。

⁷³ siyotoranne : 「siyotoranne【1項動詞】かなうものがない」(【奥田語彙】131) ; 「shiyotoranne=shiyoarawenrui / akor acha sui, tane an pirka ~, oka hine, itak hawe ene okahi.」(【久保寺辞典】307)。註 72 参照。

465	там-па тукка-п	tanpa tukka p	今年生えたもので
466	е-ноткірі-касі	enotkirikasi-	下あごが
467	курун-кане	kurun kane ⁷⁴	黒くなりかけ(ている者が)
468	ене ітак-і	ene itak h_i : —	こう言った。
469	там меноко	“tan menoko、	「そこの女性よ、
470	сон-но жай-ну	sonno yaynu	本当の考え
471	сі-но жайну	sino yaynu	真の考えを
472	е-кі-ва-кусу	e=ki wa kusu	されたがゆえに、
473	е-ікі-һіне-ікі	e=iki hi ne ciki	あなたがしたことなら、
474	а-кор маратто	a=kor maratto	私の(ための)酒宴が
475	амма-не-якка	an w_a ne yakka	あっても
476	е-теке-һе-ка	e=tekehe ka	自分の手も
477	сомо-е-кем-но	somo e=kem no ⁷⁵	舐めることなく
478	маратто атпа	maratto atpa	酒宴のはじめ(の食事を)
479	е-нітан-ка	e=nitan ka	あなたは素早く
480	кі-нанконна	ki nankor_ na!”	準備するのですよ」
481	секоп ітақ	sekor itak	と言った。
482	оро-ва несі	orowa nesi	それから
483	маратто-ан корка	maratto an korka	酒宴があったが
484	неп-ун	“nep un	「一体何を
485	камүі je-a-wa секоп	kamuy ye a wa?” sekor	子グマは言ったのか」と
486	жайну-ан-кусу	yaynu=an kusu	私は思ったので
487	а-теке-һе пока	a=tekehe poka	自分の手さえ
488	а-кем-ка	a=kem ka	舐めることも
489	сомо-кі-но	somo ki no	しないで
490	маратто-атпа	maratto atpa	酒宴のはじめに
491	а-осіраје	a=osiraye	出かけました。
492	неа ріјап	nea riyap	その子グマを

⁷⁴ 「あごひげが生えている notkiri kurun kane an (中略) [notkiri(彼の下あご), kurun(黒くなっている) kane(状態に) an(ある)] 《サル》(【人間編】12-13)。peure tukkap / epa-kurkashi- / kurun kane 若き生へたてのひげに/上唇の上/や>黒みつ>」(【虎杖丸別伝】162)。

⁷⁵ Philippi (1979: 294) には「あなたが私の饗宴を祝うとき、指をしゃぶって(食べ物を)少しでも口にするこことさえしてはならない」とある。これは「酒宴の席で供される熊の肉を、ひと口たりと口にするなどということ」で、「夫婦になることができなくなってしまうので、警告している」のだという(中川 1992: 44)。

493	камуй һопуні-куні	kamuy hopuni kuni	(普通の) クマを送る
494	оккасі-та	okkasi ta ⁷⁶	以上に
495	a-һопуні-pe-wa	a=hopunire wa	(丁重に) お送りして
496	ока-ан-ава	oka=an awa	暮らしていると
497	сіне-аніта	sineanita	あるとき
498	апа ці-мака	apa cimaka	戸が開き
499	неа оккајпо	nea okkajpo	例の若者が
500	тане-ам-піріка	tane an pirka	今ある美しさが
501	сіоарвенруі	sioarwenruy ⁷⁷	かなうものがないほどで
502	кунне косонте	kunne kosonte	黒い小袖を
503	јаіненаніне	yaunenayne	揃いで
504	утомціуре	utomciure	身に着け、
505	аһун рувене	ahun ruwe ne.	入ってきた。
506	а-јупутарі	a=yuputari	兄たちと
507	тура-но кајкі	turano kayki	一緒に
508	уверанкарал	uwerankarap	挨拶をした。
509	орова несі	orowa nesi	それから
510	ене ітакі	ene itak h_i :	こう言った。
511	камуй-а-она-һа	“kamuy a=onaha	「神である我が父の
512	орота арпа-ан	oro ta arpa=an.	もとへ参りました。
513	вен-касуј-но	‘wenkasuyno	『あまりにも
514	ајну-меноко	aynu menoko	人間の娘を
515	курўкасіке	kurkasike	助けるため (?)
516	ко-рај-ніпоске	korayniposke ⁷⁸	死ぬほどの目に
517	а-кі-акусу	a=ki a kusu	私は遭ったので
518	а-ук-ва нејақ	a=uk wa ne yak	その娘を連れたら

⁷⁶ ... kuni okkasi(ke) ta : 「…する以上に」; 「kamuy osura kuni okkaske ta a=kor ekasi a=onnere 神様を送るよりもっと立派に、私たちはおじいさんを見送りました」(【音声資料 10】134、下線は筆者)。

⁷⁷ tane an pirka si(w)oarwenruy : 「タネ アン ピリカ シオアラウエンルイ (今までの美しさ) それに増して今日の美しさ」(【萱野辞典】260)。註 72, 73 参照。

⁷⁸ 「Nen imoshma / Ponyaumbe / korainiposhke ya? / Ponyaumbe / ari itakan yakka 誰が我以外に/ポンヤウンベを/懲らすか?/ポンヤウンベ/と人々はいうけれど」(【ユーカラ集 5】174、下線は筆者)。「erainiposhke その為に死ぬ程いぢめられた。死ぬ程ひどい目にあふ [P575] <e (それにて) rai (死) niposhke (?)」(【久保寺辞典】69); 「エ=〜で、ライ=死ぬ、ニポシケ=〜をくぐり抜ける」(【神話集成 8】79) とあるので、ko-「〜に向かって」 ray 「ひどく」 niposke 「くぐり抜ける?」か。

519	a-кор кусу-не ёкорѡ	a=kor kusu ne' sekor	妻にするつもりだ』と
520	ітак-ан-ава	itak=an awa	私が言う
521	камуј-аонаѡа	kamuy a=onaha	神なる我が父は
522	ене ітакі	ene itak h_i	こう言った。
523	паёе-камуі	'pase kamuy	『尊い神様で
524	а-не-а-ћіне	a=ne a hike	私はあるが、
525	ајну-меноко	aynu menoko	人間の娘を
526	е-ук-ва	e=uk wa	お前が連れて
527	камуі-котан-та	kamuy kotan ta	神の国で
528	е-кор-ва не-јаќ	e=kor wa ne yak	結婚するのなら、
529	паёе-камуі	pase kamuy	尊き神へ
530	сі-ј-апапу-ре	siyapapure ⁷⁹	私が謝罪を
531	а-кі руwене-на	a=ki ruwe ne na	することになるのだ。
532	е-кон русуј-пе	e=kor_rusuy pe	お前が妻としたいのが
533	ајну-меноко	aynu menoko	人間の娘である
534	не-ѡаве-не-цїкі	ne hawe ne ciki	ということなら
535	оро-та арпа-ва	oro ta arpa wa	そこへ行って
536	коро ёкорѡ	kor' sekor	妻にしろ』と
537	камуј-аонаѡа	kamuy a=onaha	神なる我が父が
538	і-је-ва куё-тап	i=ye wa kus tap	私に言ったからこそ
539	ек-ан сірі	ek=an sir	私はやって来たの
540	ан-на ёкорѡ	an na'' sekor	です』と
541	ѡаве-ан-акуё	hawean akus	(若者は) 言ったところ、
542	ајпутарі	a=yuputari	私の兄たちは
543	піріка ману-ћі	pirka manu hi	素晴らしいことだと
544	анрека-каря	an=rekakar ⁸⁰	褒めてくれ、
545	не-но не-јаќне	"nenone yakne	「そのようであるなら
546	камуј-енїсте	kamuy eniste	神様を頼りに
547	а-кі ѡаве-не	a=ki hawe ne''	私たちはできる』

⁷⁹ siyapapure : si(y)-「自らを」 apapu「謝る」-re「させる」か。ネフスキー版のこの部分を Philippi (1979: 296) は註でこの部分を「重い神から非難される」と訳している。類例に「ekor yupihi / siyapapre / aki kunihi / wen ma kusu (貴女の兄上に／負けることに／なるのが／悪いから)」(【アイヌの叙事詩】451)がある。

⁸⁰ 註55参照。

548	ésekor-awe-oka	sekor h_aweoka	と（兄たちは）言った。
549	orowa-neči	orowa nesi	それから
550	ćinna ciće	sinna cise	別な家を
551	a-soj-naraje	a=soynaraye	外に建て
552	a-e-jai-mak-na	a=eyaymakna-	私は夫と仲睦まじく
553	horari-pe	horarire ⁸¹	座った。
554	aјyпутari	a=yuputari	兄たちは
555	ćisak katke mat	sisak katkemat	この上ない淑女を
556	kon-ruwene-wa	kor_ ruwe ne wa	妻にして
557	kamuj-ywenište	kamuy uweniste	神のごとき頼りあいを
558	a-ki-wa	a=ki wa	私たちはして
559	oka-an-a-kuśy	oka=an a kusu	暮らしたので
560	a-je ruwene	a=ye ruwe ne	私は語ったのです。

参考文献

Nevskii, N. A. (1972) *Ainskii Fol'klor*. Moskva.

Phillipi, D. L. (1979) *Songs of Gods, Songs of Humans*. University of Tokyo Press.

Pilsudski, B. (1912) Ainu Folk-Lore. *The Journal of American Folklore* 25(95):72-86.

アイヌ無形文化伝承保存会編（1982）『英雄の物語』アイヌ無形文化伝承保存会。

生田美智子編（2003）『資料が語るネフスキー』大阪外国語大学。

井筒勝信編（2004）「アイヌ語旭川方言辞典草案：愛和編 第二版」井筒勝信編『アイヌ語旭川方言資料集成』273-477。北海道教育大学教育学部旭川校。

魚井一由・廣田徹（2002）「門野トサ嬬のメノコユーカー」『旭川市博物館研究報告』8: 35-40。

魚井一由・廣田徹（2003）「イフンケとメノコユーカー」『旭川市博物館研究報告』9: 1-7。

浦田遊編（1998）『アイヌ・モシリー幻のアイヌ語誌復刊』釧路アイヌ文化懇話会。

荻原眞子（2014）「アイヌの叙事詩「メノコユカラ」（婦女詞曲）—若干のテキストについて—」『口承文芸研究』32: 127-140。

奥田統己（1994）「ポイヤウンペの物語—静内地方のユーカーラの構想—」『古代文学講座第4巻 人生と恋』218-232。勉誠社。

奥田統己編（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』札幌学院大学。

加藤九祚（2011）『完本 天の蛇 ニコライ・ネフスキーの生涯』河出書房新社。

萱野茂録音・編集・著作（1998）『萱野茂のアイヌ神話集成』1-9。ビクターエンタテインメント。

⁸¹ eyaymaknahararire : 「a-e-yai-makna, horari-re wa a (我) e (そこに) yai (自身を) makna (後に) horari (坐る) re (使役語尾) wa (…て) ; 私は私を私の夫の後ろに坐らしめて、私は私の夫と睦まじく座を占めて」(【神謡聖伝】649)。

- 萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典〔増補版〕』三省堂.
- 萱野茂採録・解説 (2005) 『新訂復刻 ウウエペケレ集大成』日本伝統文化振興財団.
- 金成まつ筆録・金田一京助訳注 (1959-66) 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集』 I～VII. 三省堂.
- 金田一京助 (1992[1918]) 「アイヌの詞曲について」『金田一京助全集』 7: 60-67.
- 金田一京助 (1993[1931]a) 「ユーカラ概説」『金田一京助全集』 8: 7-336.
- 金田一京助 (1993[1931]b) 「虎杖丸」『金田一京助全集』 9: 135-504. 三省堂. (鍋沢ワカルパ語り).
- 金田一京助 (1993[1931]c) 「虎杖丸別伝」『金田一京助全集』 10: 95-432. 三省堂. (金成マツ語り).
- 金田一京助 (1993[1933]) 「原始文学に現われたる性」『金田一京助全集』 12: 182-192.
- 金田一京助 (1993[1960]) 「沙流アイヌの羽衣伝承」『金田一京助全集』 10: 59-78. 三省堂.
- 金田一京助 (1992[1935]) 「原始文学としてのユーカラアイヌの民族的叙事詩一」『金田一京助全集』 7: 381-408. 三省堂.
- 金田一京助筆録・訳注 (1975) 『アイヌ叙事詩 ユーカラ集IX』三省堂 (鍋沢ワカルパ語り).
- 久保寺逸彦 (1977) 『アイヌ叙事詩 神話・聖伝の研究』岩波書店.
- 久保寺逸彦 (2020) 『アイヌ語・日本語辞典稿』草風館.
- 國學院短期大学口承文芸研究会 (1995) 『アイヌの口承文芸 第2集』(魚井一由・鹿田川見監修) 國學院短期大学第6研究室.
- 國學院短期大学口承文芸研究会編著 (2002) 『アイヌの口承文芸』國學院短期大学コミュニティカレッジセンター.
- 佐藤知己 (ローマ字テキスト作成・翻訳) (2006) 「第2章 知里ハツによる物語」北海道教育庁生涯学習部文化課編『平成17年度 知里真志保フィールドノート(5)』 69-113. 北海道教育委員会.
- 砂沢クラ語り・浅井亨訳註 (1983a) 「邪まな小母さんの話」アイヌ無形文化伝承保存会編 (1983) 『アイヌの民話 1』 67-80. アイヌ無形文化伝承保存会.
- 砂沢クラ語り・浅井亨訳註 (1983b) 「海の怪物の話」アイヌ無形文化伝承保存会編 (1983) 『アイヌの民話 1』 81-93. アイヌ無形文化伝承保存会.
- 田中水絵 (2011) 「ニコライ・ネフスキーのアイヌ研究と知里真志保」『環オホーツクの環境と歴史』創刊号: 24-32.
- 田中水絵 (2012) 「ニコライ・ネフスキーが遺したもの 東洋学研究所蔵アイヌのフォークロア原稿&折口信夫宛て絵葉書」『環オホーツクの環境と歴史』 2: 47-57.
- 田中水絵 (2013) 「ニコライ・ネフスキーの遺したもの その2—小樽高商のノート&アイヌのフォークロア『雀子』—」『環オホーツクの環境と歴史』 3: 19-25.
- 田中水絵 (2014) 「ニコライ・ネフスキーが遺したもの その3—手稿「椋鳥」—」『環オホーツクの環境と歴史』 43: 9-46.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.
- 田村すず子・田中聖子編著 (1984-1997) 『アイヌ語音声資料』 1-10. 早稲田大学語学教育研究所.
- 知里真志保 (1954) 『分類アイヌ語辞典 人間篇』日本常民文化研究所.
- 知里幸恵編訳 (1978[1923]) 『アイヌ神謡集』岩波文庫.

- 中川裕 (1992) 「ネフスキー『アイヌ・フォークロア』日本語訳についてのコメント」『ウエネウサラ』10: 41-49. 私刊.
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館.
- 中川裕 (2006) 「アイヌ人によるアイヌ語表記への取り組み」塩原朝子・児玉茂昭編『表記の習慣のない言語の表記』: 1-44. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 中川裕 (2009) 「アイヌ英雄叙事詩成立過程の時間層—ユカラにおけるイシカラ人の役割—」『口承文芸研究』32: 29-42.
- 中川裕・遠藤志保 (2016) 『国立民族学博物館調査報告』134.
- 中川裕採録・訳・註 (2008) 「アイヌ口承文芸テキスト集 (8) 白沢ナベ口述 ユカライルパイェ: シヌタブカ人. 石狩人と戦う」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』10: 291-313.
- 中川裕 (2009) 「アイヌ英雄叙事詩成立過程の時間層—ユカラにおけるイシカラ人の役割—」『口承文芸研究』32: 29-42.
- 中川裕採録・訳・註 (2012) 「アイヌ口承文芸テキスト集 (12) 白沢ナベ口述 ユカライルパイェ 敵の村の美女を妻に迎えたシヌタブカウシクル」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』14: 179-213.
- 名取武光 (1941) 「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』4: 35-112.
- 日本民話の会編 (1991) 『世界の昔ばなし (下)』講談社.
- ネフスキー, N 著・岡正雄編 (1971) 『月と不死 東洋文庫 185』平凡社.
- ネフスキー, ニコライ (1991) 『アイヌ・フォークロア』(L・グロムコフスカヤ編・魚井一由訳) 北海道出版企画センター.
- 萩中美枝 (1987) 「アイヌの口承文芸オイナ」『国立民族学博物館研究報告別冊』5: 339-407.
- バチラー, ジョン (1981) 『アイヌ・英・和辞典』第4版. 岩波書店.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 (1993) 『八重九郎の伝承』1. 北海道教育委員会.
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編 (1999) 『八重九郎の伝承』7. 北海道教育委員会.
- 門別町郷土史研究会編 (1965) 『アイヌ叙事詩クドネシリカ』(鍋沢元蔵筆録、扇谷昌康脚注) 門別町郷土史研究会.
- 門別町郷土史研究会編 (1966) 『アイヌの祈詞』(鍋沢元蔵筆録、扇谷昌康脚注) 門別町郷土史研究会.
- 門別町郷土史研究会編 (1969) 『アイヌの叙事詩』(鍋沢元蔵筆録、扇谷昌康脚注) 門別町郷土史研究会.
- 吉田巖 (1953) 「古稀談叢 十勝アイヌ 11 故老の談話記録」『民族学研究』17/3-4: 83-93.
- 早稲田大学語学教育研究所アイヌ語研究会編著 (1998) 『アイヌ語音声資料』11. 早稲田大学語学教育研究所.
- 早稲田大学語学教育研究所アイヌ語研究会編著 (2000) 『アイヌ語音声資料』12. 早稲田大学語学教育研究所.

(さかぐち りょう・千葉大学人文公共学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

The Text of a *Menokoyukar* (Woman's Epic) Recorded by Nikolai Nevskii
“The woman who had been kidnapped by *Repunot-un-kur*”

SAKAGUCHI Ryo

Summary:

Nikolai Aleksandrovich Nevskii (1892-1937), a Russian and Soviet linguist, collected Ainu materials in Japan in the 1920s. In his collection (Nevskii 1972), there are two *Menokoyukar*, which means “Woman’s epic” in the Lower Saru basin. One was written in Ainu (phonetic notation), with addition of Russian translation based on the original text, and the other was written only in Russian translation. These texts have already been translated into Japanese; however, Uoi’s translation (Nevskii 1991) varies a little from the original text. The author will take up the *Menokoyukar* (woman’s epic) with Ainu text from Nevskii, which provides a complete story consisting of 560 lines, for direct translation to Japanese. The present work is an attempt to reconstruct the text in phonological transcription and Japanese translation.

Outline of the text:

(This is narrated by a woman from *Tomisanpet*)

I was carefully raised at a *Repunnot* by a man called *Repunnot-un-kur* “The man living in the *Repunnot*”. We raised the bear-cubs for three years. My brother (*Repunnot-un-kur*) went to trade (*uymam*) to prepare sake for the bear ceremony. After a while, my brother's boat came ashore, but for some reason, the cargo was being unloaded to the house of *Kotanra-un-kur* “The man living below the village”. I laid down in tears, and a boy like a deity (bear-cub) appeared to me in a dream and said, “You are a woman from *Tomisanpet* who had been stolen away and raised by *Repunot-un-kur*, who intends to marry you. As *Repunnot-un-kur* was coming home, *Kotanra-un-mat* “The woman living below the village” told him that you were laying together like dogs in his absence. That is why they are coming to kill us (you and I)”.

When night fell, the companies of armored men were running around. My bear-cub took down every single one of the armor-clad men. The cub asked me to stick close behind him and tried to take me back to my native land, *Tomisanpet*. He ran in the direction of the sea. We went across the sea and came ashore. From there, we went upstream along the river. Then there was a populous village. The people there attacked us as well. My bear-cub killed all of them down to

the last man. Afterwards, we went upstream along the river, and arrived at the source of a different river. We then went down the different river and came across a fine fort (*kamuy-kat-casi*). Out of the fort, a man with beautiful hair and beard came out. Inside the fort, stacks of sacred vessels were stretched out. There was also his younger brother. When I told them the reason for coming, both men said, "Our younger sister!" and we wept with each other.

We prepared to send my bear-cub off. As I shed tears when it was time to send my bear-cub off, my bear-cub on the spirit fence (*inawcipa*) said to me, "When you send me off, you must not even lick the bits of food sticking to your fingers during the ceremony" (eating bear meat would prevent me from marrying them). So I did not eat a single bite of the festive feast. The bear-cub was sent off safely.

One day, a young man (=the bear) in a black garment (*kosonte*) came up to us. He said, "When I told my father that I wanted to marry a human girl, my father said, 'I am a weighty god, and if you were to take a human woman and marry her in the land of the deities, I would be rebuked by the weighty gods. If you want to marry a human woman, then go down there and marry her!'" My brothers thanked the man. Then we got married and lived happily ever after. My brothers also married supreme women and lived happily.